



虚構の空路 森村誠一



虚構の空路

昭和四十五年三月二十八日 第一刷発行
昭和四十六年五月三十日 第二刷発行

著者 森村誠一

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話 東京(942)一一二(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 鈴木製本株式会社

定価 四五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 森村誠一 昭和四十五年

虚構の空路
目次

多摩町蓮形寺付近	7
シャンデリヤと死と	13
ローマの恐喝	21
三角形の底辺	36
ダンプとゲロリア	52
バンコック 1・11 & 新幹線 10・20	56
清々しい情事	68
大小談議	80
犬とエリート	84
結婚式の空白	98

羽田国際空港

仮説の難点

死んだ旅券

パリ・オルリ空港

通過の盲点

別件逮捕

新たな展開

アリバイ自動交換機

虚無への旅券

風光る幹線

デザイン

伊藤憲治

虚構の空路

蓮形土

1

「こりやあまたひどい降りになったなあ」

藤倉伝造は立ち上がりながら戸外の雨音にふと耳を傾けた。

「どうだな、もう一局？ そのうちに雨も小降りになるだろう」

岡田弥一がもっけの幸いのような顔をして引き止めにかかった。一応伝造が白を握っているが、腕前は互角である。

二人共、隱居の身分になってからは家業を息子たちに任せて、盆栽をいじったり、碁を打ったりして悠々と暮らしている。

今日も午後から降り出した雨の中を、近所に住んでいる伝造がわざわざ出かけて来て、今まで勝ったり負けたりとの勝負をくりかえして来たのである。

弥一の誘いに、未練げな表情が伝造の面に揺れたが、

「いや今夜はもうおいとましよう。日曜だもんで、家族が久しぶりに揃うからな」

「残念だな、それじゃ気をつけて帰れよ」

「うん、今日はおじやまをしましたな、それじゃあ奥さん、どうも大変ごっつおうになって一

伝造に声をかけられた弥一の妻は、碁盤のそばに出した茶、ウケの菓子をも、急いで半紙に包むと、

「大して珍しいものじゃありませんが、お孫さんに持って行って下さい」「いやあこりやご、つ、つ、おうになった上にお土産みやげまでもらってすまないね」

と弥一の妻からおしいただくように菓子包みを受け取って戸外へ出た。

伝造の家は、街道を越えた日野市寄りにある。ここから歩いて行っても大したことはないが、雨が降ると道がぬかってひどい状態になる。

外へ出て傘をさすと、雨あしはいっそう激しくなったように感じられた。傘に雨の水圧が驚くほど強くかかり、傘の防水布の防ぎ切れなかった雨水が柄を伝って落ちてくる。

「夕飯までに帰ると言っておいたから、みんな空き腹をかかえて待っているだろう」

伝造はぬかるみにとられがちな足を急がせた。雨が強く夜が暗いだけに、野末に点滅する灯が暖かそうだった。九月の末の雨は冷たく、老いた身体に沁みる。

伝造は我が家のみかん色の灯の下の団欒だんらんが恋しかった。今年三つになる初孫がよく回らぬ舌で「おじいちゃん、どこ行ったん？」と言っている表情が目には浮かんた。

「そうだ。このおみやげを失くしたら困る」

伝造は弥一の妻からもらった菓子の包みを懷の中でたしかめた。

ようやく街道にさしかかった。昼の間は、車の列がひきもきらぬ所だが、今は日曜の夜とあって、都心の方へ帰るべき車は帰りつくして、車のかげも見えない。

いつも渡り馴れた所である。伝造はちょっと左右に目をやってから横断しはじめた。その時ぬかるみで大分痛んでいたらしいハナオがブツツと切れた。体のバランスを軽く失ったはずみ

に懷中から菓子包みが転がり落ちた。

「いけない！ 孫のみやげが」

口走った伝造はあわてて地面に身をかがめた。強烈なライトが闇をつんざいたのはその時だった。愕然とのけぞった伝造は一瞬、目を射られて、その場に立ちつくした。

濃密な雨あしに包まれた伝造の黒っぽい着衣をめぐり、ライトの背後の黒い^{どうもう}獐猛な物体は、少しも速力をゆるめることなく突っこんで来た。

肉塊のつぶれるような衝撃音に、黒い物体はいったん速力をゆるめたかに見えたが、すぐ以前以上の速力を出して闇の中に逃げこんだ。

赤いテールランプが黒い雨あしの中に溶けこんだ後、藤倉伝造の体はすでに一個の無機質と化して街道の脇の崖にひっかかっていた。伝造が命を賭けて拾おうとした菓子包みが、闇の中にいつまでも白く浮き立って見えるのが異様だった。その後もとぎれとぎれながら何台もの車が、事故現場を通過したが、崖の中腹にひっかかった伝造の死体に気がついたものはなかった。

2

東京都南多摩郡多摩町蓮形寺付近の鎌倉街道で、藤倉伝造の死体が発見されたのは、九月二十九日の早朝である。発見者は出勤途上のサラリーマンであった。

騒ぎを聞いて駆けつけた近所の人間の証言によつて、伝造であることが確認され、すぐに家にも連絡が行った。伝造の家人は、雨があまりひどいので、砦を打ちに行った砦敵の岡田弥一の家泊めてもらったものとはばかり思いこんで、さして心配をしていなかった。

以前にもそのようなことが何度かあった。あいにく岡田家に電話がなかったので、今朝まで気がつかなかったわけである。

伝造は道路わきの高さ約六メートルの崖の中腹にひっかかるようになって死んでいた。昨夜の雨が現場および死体の傷口の血を洗い流していたが、死者の頭蓋は砕け、胸腔は潰れて内臓がハミ出していた。思わず目を背けさせるほどにむごたらしく、老人の受けた衝撃の凄じさを物語っていた。バラバラになった傘もその近くにあった。

「わしがゆんべむりにも引き止めればよかったんだ」

弥一は、むざんな友の姿に声をつまらせた。

「あんな所に、あのおカシが！」

弥一の妻が、現場保存線のひかれた内部の一角を指した。通行する車に幾重にも踏みくだかれて、原型はなかったが、正しく伝造が「孫のみやげに」と大事そうに懷の中へしまいこんだ菓子だった。包み紙の方は雨に洗い流されたくしく影も形もなかった。

日野署および本庁交通執行課の轢き逃げ捜査班が、現場を徹底的に検索したが、目ぼしい手がかりはほとんど昨夜の雨に流されており、わずかに若干の塗料片とガラスの破片を採取しただけであった。

日野署交通課には「蓮形寺轢き逃げ捜査本部」が設けられた。

塗料片とガラスの破片は直ちに科検へ送られた。しかし厳密な鏡検によって塗料片はメーカーが最初塗ったものではなく、後から修理工場かどこかで吹きつけられたものであることが分かった。

残る唯一の資料であるガラス片は、ここ数年グロリア系に装着されている、アウトサイド

バックミラーのレンズ片であることが辛うじて識別された。

しかしここ数年のグロリアとなるとそれこそ何千台あるのか見当もつかない。

さらに捜査班の懸命な地取り捜査により、近所に住む工員が、同夜八時ごろ現場から少し南の関戸付近を、ダンブカーがガードレールにガンガン接触しながら凄じい勢いで、鎌倉方面に向かつて走って行くのを目撃したという聞きこみを得た。

残念ながらダンブの車種までは見極めなかったが、現場は八王子方面から土砂を積んだダンブがひんばんに往来するために、**加害車**としてダンブのすじも充分考えられた。

となると現場付近から採取されたグロリア系のバックミラーの破片がひっかかって来たが、同車系のある車種には、アウトサイドバックミラーステアの先端が凸起しており、ひっかかるおそれがあるとして、**欠陥車**の指摘を受けたものがあるので、たまたまこの車種が現場付近で被害者以外の何かに接触してバックミラーを破損したという偶然も考えられた。

とにかく唯一の目撃者によってダンブが捜査線上に浮き上がったので来たのであるから、まず捜査対象は現場を往来するダンブカーに置かれたのである。

目撃者の証言によれば、**容疑車**は八王子方面から疾走して来た。八王子付近の砂利採掘場所は美山、滝山付近で、そこに出入するダンブ業者は法人と個人を合わせて約百八十台ある。

日野署に設けられた轢き逃げ専従捜査班は、この百八十台を一台ずつシラミつぶしにあたっていた。

東京、神奈川、埼玉、遠くは山梨や静岡まで、当日前後、**八王子**に出入りしていた業者を追って、刑事たちはそれこそ気が遠くなりそうに根気のいる捜査をはじめたのである。もち

ろんグロリアの線も全く捨てることはできない。

本庁から派遣された四名と、日野署からの一名のたったの五名でこの老大な車をあたるのである。先方を訪ねる前に予告するわけにはいかない。留守なら行先を追う。一日一台も洗えない時もある。

しかも轢き逃げ犯捜査にとって何よりも重要なことは、早期決戦である。捜査が長びくと、その間に車を直されたり、あるいは車そのものを解体されてしまうことがあるからだ。

捜査班は焦燥の思いを押えながら、足で百八十台の車を一台々つぶしていくしか方法がなかった。

シャンデリヤと死と

1

十月二十日午後二時、東京中央区京橋に新設された巨大ホテル、エンパイアホテルの大宴会場「天平の間」で、そのホテルの社長、能見新一郎の三女雪子と、新興の旅行幹旋業、三立観光の若き営業部長音川達也との絢爛豪華たる結婚披露宴が開かれていた。

舞台装置が豪華なばかりではなく、出席者に、日本観光業界の大物はもとより、政財界の有力者のほとんどすべてが顔をそろえていた。正にキラ星のごとくという形容はこの日この場所のためにあるようであった。

折りから有史以来といわれる世界的なレジャーブームで、工業化がその到達点において産み出したマスレジャーは、国民生活の変革と余暇の増大や所得の向上に伴って、観光需要の増加に一層の拍車を加えていた。

特に我が国ではEXPO70をひかえての魅力的な市場性と巨人旅客機、ジャンボジェットの内乗入れをすぐ近い将来において、観光業者にとっては正に「わが世の春」の感があつた。

観光業者と一口に言った場合、その範囲と内容はきわめて広汎な分野にわたり、各種関連産業との複合体であるとされるが、その中でもその存在を観光旅客だけに頼っている直接的観光

業者と、その他にも存在の基礎がある間接的観光業者の二つがある。

前者の代表的なものに、ホテル旅館などの宿泊業者と、旅行者に旅に関する一切のサービスを提供する旅行幹旋業者がある。これらは旅行者がないことには営業が成り立って行かないという点で、正に「直接的」である。

後者の代表的なものは、航空機、船、鉄道などの交通業者である。観光往来の動脈として今日の観光に必要不可欠な存在であるが、その運ぶものは必ずしも観光旅客だけではない点において「間接的」とされるが、必ずしもこの区分通りに解釈できない場合が多い。

特に、直接業者のホテルは我が国においては来訪外客を主たる対象として發達して来たが、東京オリンピック以降の来訪外客の飛躍的上昇によって、部屋数が絶対的に不足している。

現在でもその不足数は七千とも八千とも言われているが、ジャンボジェットやSSTが本格的に就航するようになれば、ホテル不足はますます深刻なものとなることが必至である。

とにかくジャンボは一機で四百九十人もの客を運んで来るのだ。四百九十人といえば、客室数三百室くらい的大型ホテルの収容量である。

これが超音速でピストン輸送をやるうというのだから、ホテル不足がいかに深刻なものか分るのである。

特に客を旅へ誘い出すことによって、営業を成り立たせている旅行幹旋業者の頭は痛い。ようやく客を誘い出しても泊めるべき場所がないのだ。一人や二人の邦人個人客ならば、日本旅館へハメるといふテもあるが、一番妙味のある外客団体を動かすには、大型ホテルを抑えておかねばならなかった。

団体は、一緒に食事をして、一緒に寝て初めて団体といえるのである。特に外客団体を満足